

天使

PER CARITATEM
AD VERITATEM

vol.34 March 2023

T E N S H I C O L L E G E

一人の子どもと世界の意味

2022年12月11日号のカトリック新聞は、その第一面冒頭で、次のように報じていました。「教皇フランシスコは、ロシアによるウクライナ侵攻が始まって9か月に当たって、ウクライナの国民に手紙を送り、耐えがたい死と破壊に遭っても勇気と国家への愛を保ち続ける姿を称賛した。」

私はフランシスコ教皇の断腸の思いに溢れたこの手紙の中で、次の言葉に、特に深い共感を禁じ得ませんでした。

「(私は) 何よりも、子どもたちの苦しみを思います。どれほど多くの子どもたちが殺され、負傷して、親を失うか、母親から引き離されてきたことでしょうか。」「私は皆さんと共に、子どもたち一人一人のために涙を流します。その子どもたちは、この戦争によって命を落としたのです。……その一人一人の死のうちに、全人類は敗北しています。」(下線筆者)



守護の天使と幼子

下線を施した言葉を目にして、私はユダヤ教のことわざ(タルムード)の一節を思い出しておりました。スピルバーグ監督の映画『シンドラのリスト』のキャッチフレーズになったことでも知られています。

「一人の命を救う者は全人類を救うことができる」

不思議な言葉で、うまく説明はできませんが、「一人の命」というものが、何かの一部分であったり、多数によって補われたりできるような、そういう代わりの効く存在ではなく、絶対的な、つまりは他との比較を絶した、唯一無二(無比)の存在だからだ、という強い確信によったものでしょう。そこにはたぶんまた、『旧約聖書』の、「唯一の神」に似せて「唯一の尊厳」を帯びて創造された「唯一の人間」、という信仰が背景にあるに違いありません。

ここから同時に私は、最近の日本社会で問題になった子どもをめぐる虐待や放置や暴力の数々を思い出しております。驚くべきこれらの問題には、フランシスコ教皇が「全人類は滅亡しています」と言われるほどの重大性があります。私たちは意を決して「一人の命を救う者」となるように努める必要があります。教育の焦点もそこに置かれるべきではないかと思います。

教皇の怒りとも嘆きとも思える言葉から、「子ども」についての福音書の教えを思い出してもいます。

「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならないければ、決して天(神)の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供

天使大学 学長 田畑 邦治



を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。

しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。」(マタイ福音書18・3 - 6)

福音書の中で、イエスがこのように「呪い」ともいうべき強い言葉で断罪している態度はまれなことです。それほどに「一人の子供」が重視されているのです。

先に、これらの教えにこそ「教育の焦点」が置かれるべきと述べましたが、イエスの言葉からも、「子供」は神に一番近い存在であって、決して大人からみて加工したり鑄造したりしなければいけない未完成品ではない、ということ私たちはよく考えてみる必要があるかもしれません。どうしても、子供は「途上にある未完品」であるとか「教育の対象」だと思い込んでしまうのが常識だからです。

松尾芭蕉の言葉にも「俳諧は三尺の童にさせよ」(服部土芳『三冊子』)とあります。俳諧に巧みになると上手に作ろうとする私意が働き、物事からの自然な感動が消えてしまうものだ。なるほど、子ども学の専門家に言わせると、いろいろな場面で、大人は子どもに教えるよりも、子どもから学ぶことが少なくないのであり、それは子どもが「未熟な大人ではなく、そのつどの完成体」であるからです(前任大学の椎橋先生の言から)。

繰り返しになりますが、ここで今一度、「子ども一人一人の死のうちに、全人類は敗北しています」という言葉の深遠な意味を味わってみたいと思います。この言葉は何か思い込みとか誇張ではなく、深い感情と人間観から生まれたものだからです。一人一人の子どもが全人類を代表していて、その一人が死ぬことは、けっしてあだやおろそかに見過ごすことはできないのであって、世界の帰趨にかかわることである、ということです。日々世界や社会で起きているできごとを、この「子ども一人」という視点から見る事ができれば、私たちにできることも分かるかもしれません。「子ども一人」。これは、私から見て他の人がそうであるだけではなく、私たち自身もまた、何があっても粗末にできない貴重な存在であることを意味しています。

「二羽の雀は一アサリオン(10円?)で売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父(神)のお許しがいなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」(マタイ10・29 - 31)



聖ヨゼフと幼子イエス

学びの振り返り

就労している中高年女性の加齢に対する適応についての研究



大学院看護学専攻保健師コース2年 大滝 英理香

私は生活習慣病予防に興味を持って大学院に進学し、様々な方からお話を伺わせていただきました。その中で、体調の変化を「歳とともに重ね」と語る方が多いことに気づきました。これまで私は生活習慣の改善行動に繋がらない難しさや歯痒さをずっと感じていましたが、住民の方は病気を中心に考えるのではなく、加齢に伴う変化を日々感じつつ、それに馴染もうとしながら自分の生活を捉えているのではないかと考えるようになりました。

また社会的には、年齢を重ねても働く人が増加し、働く女性も増えています。なかでも中高年女性は閉経など心身の変化を経験しやすく、健康で元気に働けるような支援の必要性が高まっている背景も踏まえ、『就労している中高年女性の加齢に対する適応』というテーマでインタビューを用いた研究を行いま

した。

実際に研究を進めるにあたっては、快くインタビューを引き受けてくださった研究対象者の皆様や、丁寧に指導をくださった先生方、困ったときに相談に乗ってくれた院生の仲間など、たくさんの方に助けられました。実習や就職活動などで忙しい時期もありましたが、ゼミを行うことで前に進んでいるという実感を得られたことが自信と安心感につながったと思います。修了後は保健師として自治体に就職しますが、研究を通して身に付けた文献の読み方やコミュニケーションのとり方は私の助けになってくれると思いますし、自分なりにテーマへの結論を出したことは大きな自信になります。働いてからも日々の活動の中に疑問を見つけ、それに丁寧に向き合いながら保健師として成長していきたいと思っています。

外国人女性も日本で安心して産褥期を過ごしてもらうために ～学修と研究を生かして～



大学院助産研究科2年 成田 真唯

もともと国際協力に興味を持っていた私は、看護の勉強する中で開発途上国での出産は日本と比べて危険が多く、死亡率が高いことを学び、国際的に活動する助産師を目指すようになりました。天使大学院助産基礎分野には国際助産コースがあり、開発途上国での母子保健や国際協力について学ぶことができるため、入学を決めました。

入学してからは出産の文化、国際助産学の講義から日本にとどまることのない世界での出産や出産についての考え方、方法などについて幅広く学ぶことができました。それまで日本での出産は安全安心で世界に誇れるものだと思っていましたが、これらの講義をきっかけに実際はそうではないかもしれないと考えるようになりました。医療設備が整っている

から安全安心というわけではなく、出産するお母さん本人がどのようなケアを受け、自分の出産体験をどのようにとらえられているかが大切であり、それが安全安心につながるのだと学びました。

修士論文の研究テーマは、「日本で出産した外国人女性に求められる産褥期の助産ケアと育児支援の検討」です。私は現在、札幌市内の寮で留学生と一緒に生活しており、今まで国際交流のイベントなどにも参加してきました。その中で日本で出産した外国人女性と話す機会があり、異国である日本での妊娠出産子育ても安心して過ごせるような助産ケアができるようになりたいと思い、このテーマにしました。今後病棟でも外国人女性に出会う機会があると思うので、今まで学修してきたことや研究を生かし安全安心な助産ケアをしていきたいです。

体育祭を実施して～やればできる！～

看護学科2年 三好 凌太郎



2022年度の体育祭はコロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となっており、また体育祭を経験していないメンバーでの体育祭運営だったので未知数な部分が多いものでした。私自身も授業や課題などで忙しい時期が重なっており、多くのものと並行しながらの企画運営となりました。過去の資料などはコロナウイルス流行前の資料なのであまり参考にはできず、感染対策について熟考して1から体育祭の企画をすることになりました。

山積みになっているレポートを優先するか、企画資料の作成を優先するか、迷いながら過ごした日が続いていました。中には深夜2時にレポートが終わり、その後朝の6時までしおり作成やルール作成をしていた日もありました。

看護をたどる時間へ～自分の「看護」を探しにいく～



大学院看護学専攻基礎看護学コース1年 星 まどか

私は天使大学を卒業後、実践家として働いてきました。私にとって「看護」は天使大学で学んだことが基礎にあり、「愛をとおして真理へ」という建学の精神は私の看護観に大きな影響を与え、看護師としての私を育ててきました。医療の進化や高齢化が加速する昨今では、病院の形態もここ10年で大きく様変わりをしています。入院短縮に伴い、医療の効率化を求められるようになり業務改善が繰り返されています。段々と私の思う患者に寄り添いながら看護を展開することに難しさを感じるようになりました。私が諸先輩に教えていただいた「看護」を後輩へ伝承していくことに、うまく伝承できない自分にもどかしさを感じてい

ました。迷いながらも看護師を続けていましたが、「大好きな看護師の仕事をそのまま好きでいて欲しい」という家族の言葉が私の背中を大きく押してくれました。私にとっての大学院への進学は、自分のもどかしさと向き合う自分探しの時間になっています。懐かしい学び舎に戻り、大学時代を知る先生との再会、その昔実習で指導していた子達は同級生になり、今もなお臨床で働きながらも学んでいる同士、新しい出会いが刺激になっています。もちろん家族にも支えられ、自分探しは実りのある時間を過ごすことができています。いつか後輩たちに胸を張って「看護」を伝承できる自分になれるように、自分探しの時間は続いています。

コンビニ食を活用したメニューの開発に関する研究



栄養学科4年 北村 瑞季

ライフスタイルや家族構成の変化に伴い、今や家庭では調理済み食品の利用が増加しており、食生活は多様化しています。中でもコンビニ食は調理済み食品を代表するものであり、多くの人にとって身近な存在となっています。今後も広がりが見込まれ、栄養バランスに配慮したコンビニ食の活用方法を考案することは利用者の健康増進や生活習慣病予防に役立つことに繋がると考えられます。

今研究では、「コンビニ食を活用したメニューの開発に関する研究」をテーマとし、コンビニの惣菜を活用し、考案したレシピを天使大学の大学生10名に試食してもらい、アンケート調査を実施しました。

また考案したレシピを地域住民へ広めていく手段として、「チラシ」を使用したいと考え、北海道のコンビニ企業である「株式会社セコマ」（以下セ

コマ）へプレゼンテーションを行いました。

コンビニの惣菜を活用したアレンジレシピの考案では、栄養のバランスを整えることと、手順が簡単であるといった作りやすさ、また食べたいと思ってもらえるような美味しさの調和が重要であることが分かりました。セコマへのプレゼンテーションでは、キャッチコピーの大切さを学びました。一目で内容が伝わり、印象に残るキャッチコピーを考えることは、アレンジレシピに興味を持ってもらえることに繋がり、レシピをより広めていくために効果的であることが分かりました。考案したレシピの「サラダチャーハン」は1食に必要な野菜が80%とれる、「コロコロアイスヨーグルト」は牛乳とヨーグルトでカルシウムがとれるという特徴を持っています。以上の二つのレシピは、セコマのチラシに、その他のレシピは企業ホームページに2月から掲載され、地域住民への周知に繋がりました。

忙しい時期には全て投げ出したくもなりましたが、一つ一つを確実に終わらせて行けば自分のように要領があまり良くないタイプでもなんとかゴールに辿り着くことができることを知ることができました。

今回の体育祭は、正直キツイことも多かったですが、面倒ごとから逃げることの多かった自分でも「やれば出来る」という事が分かり、これからの自信に繋がる成長の機会にすることができました。



専門職への誓い～看護学科～

戴帽式

芽生えた看護の道を進むことへの自覚



看護学科2年 清水 美侑

私は、11月22日に行われた戴帽式に参加しました。また、戴帽式係として準備の段階から関わりました。戴帽式係として式に関わって感じたこと、戴帽式を通して得られた貴重な経験について述べたいと思います。

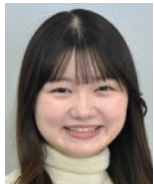
正直なことを言うと、戴帽式についてあまり知らず最初は大きな行事に関わってみたいという漠然とした思いから、戴帽式係を引き受けました。戴帽式係は、看護学科22回生の看護職や大学生活に対する思いをまとめ、誓いの言葉を作成します。作成する過程で、実習や大学生活に対する不安や焦りを感じていたのは自分だけではなく、周りの仲間たちも同じ気持ちだったことを知りました。コロナ禍で制限がある中、実習が途中で中止になったりと、変化に戸惑いながらも学びを継続できたのは、周りに支えてくれる多くの人たちがいたからだと改めて気づきました。それは、戴帽式の準備でもそうです。私たちのために多くの人に関わって戴帽

式が行われていて、貴重な体験ができています。戴帽式係になったことで感謝の気持ちをより強く感じました。

戴帽式では、ナースキャップの授与、キャンドルサービス、誓いの言葉などがありました。今までは、看護者を目指すことについてぼんやりとしか考えていませんでした。しかしナースキャップを受け取ったときに、私は看護者としてこの道を歩んでいくのだという覚悟と責任を感じました。このような決意の瞬間を、仲間とともに、親や先生方に見守られながら迎えることができ、より身が引き締まる思いでした。

今回の戴帽式を通して、看護職の道を進むための自覚や責任を感じ、これからの大学生活をより一層充実したものにしていきたいと思いました。そして、戴帽式係として実際に誓いの言葉をみんなの前で声に出して読むことで、より自分の中に響いたような気がしました。準備にも携われたことは大きな経験となりました。今回の決意を胸に、残りの大学生活を大切に過ごしていきたいです。

戴帽式に参加して ～人から人へと繋がる愛～



看護学科2年 松井 佳映

11月22日に、看護師を目指す者としての意識を高め、その責任を自覚するための儀式である戴帽式が開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中、天使大学において伝統的な行事である戴帽式に参加できたことを大変嬉しく思います。感染対策に努めながら、私達96名の戴帽生のためにあらゆる準備をしてくださった関係者の皆様に心より感謝いたします。戴帽式を迎える前までは、新型コロナウイルスの影響による慣れないオンライン授業や、複雑な実技演習、大量の課題に追われ、今の自分が本当に看護師になれるのだろうかと考えていました。また、看護学生にとって最大の学びの場ともいえる病院実習が中止となってしまったため自分自身が看護師として臨床で働くイメージがなかなか得られず、不安を感じる毎日を過ごしていました。しかし、戴帽式でナースキャップを頂き、キャンドルセレモニーを通して、どんなに暗い中でもキャンドルで患者を照

らし続け、ケアに当たったナイチンゲールの精神を受け継いだことから、自分は看護師になるのだという覚悟を得ると同時に、未来への希望を感じました。人から人へと繋がっていくキャンドルの灯火は、看護において重要となる真心や愛が人から人へと繋がっていくかのように見えました。どうかこの先もキャンドルセレモニーで繋いだ灯火が消えぬように、看護師を目指す者としての責任をもって、守っていききたいと思います。また、先輩からのお話では、あなたには家族、友人、先生方など沢山の人がいるから大丈夫という言葉があり、とても心に残りました。人間誰も未知の世界を手探りで進む時には、不安を抱えますが、一人ではないと思うだけで心が救われました。学びの場があることは決して当たり前ではないこと、自分の周りにはどんなに辛いことも共に乗り越えてくれる心強い仲間がいること、そして誰よりも近くで夢を応援してくれる家族がいることなど、今自分が置かれている環境に感謝の気持ちを忘れずにいたいです。



専門職への誓い～栄養学科～

Food and Life Step-up Ceremony

ステップアップセレモニーに参加して～自分を見つめなおす時間の大切さ～



栄養学科2年 小島 依美里

10月11日、修養会が行われました。この会は式典前に自分のこと、友人や家族のことについて考えるものです。学校に行くと最初はグループワークでした。グループワークのテーマは「私の隣にいる人のためにできることはなんですか?」。その漠然としたテーマに少しの戸惑いを感じながら始まりました。自己紹介から始まり、その後、紙に自分の良いところ、メンバー一人一人の良いところを書き、渡します。私はみんなから渡された紙を見たときに驚きました。短所だと思っていたところが褒められていたり、自分では考えずにやっていた行動が良いところとして書かれていたりしたのです。自分の良いところを一つ書くことにとても悩んでいたのに、あっさりみんなから良いところを何個も教えてもらい、うれしさを感じました。自分の長所が、どのようにまわりの人に役立つのか話し合い、その中で自分を認めることができました。

ステップアップセレモニーでは自分を振り返ることができました。天使大学に入学して早二年。大学生活にも慣れてきて、何となく毎日を過ごしてきた時にステップアップセレモニーが行われました。なぜ管理栄養士を目指したのか、どんな管理栄養士になりたいのか、初心に戻って考えることができました。三年生から、臨地実習が始まります。「ステップアップセレモニーのキャンドルの光は、任された患者さんのために自分の愛を通して、栄養を通して健康的な生活へと導く光を意味している」というケン神父の言葉を胸に、そしてこの二年間、学ぶための環境を整え指導してくださった先生方、学校に通うための支援をしてくれている両親、一緒に学び、励まし合いながら成長してきた友人に、感謝の気持ちを忘れず、残り二年の学生生活を送りたいと思います。

今回、自分を見つめなおすことのできる貴重な行事に参加できてとても嬉しかったです。

覚悟 ～ステップアップセレモニーを終えて～



栄養学科2年 藤川 萌夏

私たちは2年前、これからの生活に向けた期待と不安を胸に抱きながら天使大学に入学しました。しかし、当初からオンデマンドやZoomでの授業が続き、対面でできたのは人数を制限し授業時間が短縮された調理実習と実験のみでした。このような状況では、とても大学生になった感覚は味わえませんでした。

2年次になり、栄養学科専門の教科が増えたことにより、授業のレベルが確実に上がっていると実感しました。ようやく大学生らしい生活だと感じるできるようになり、充実した毎日を送っています。さらに今回、ステップアップセレモニーに参加したことで、いよいよ管理栄養士になるための準備が始まるのだと強く感じました。そのうえ、天使大学独特のセレモニーということもあり、天使大生としてのプレッシャーに身が引き締まる思いです。これまで先生方から学ばせていただいたことにひとつも無駄はなく、

自分がこれから向かうであろう道の道しるべとなってくださっているということに感謝しなければならないと、改めて感じました。この状況を最大限に利用することで夢を勝ち取るのだという覚悟を誓う日であったと思います。さらに、ろうそくが順番に灯っていき、明るさが広がっていく様子を見て、同じ夢に向かって走っている仲間がこんなにいたのだなと改めて実感しました。この大学に入った理由は皆違うけれど、縁があって出会えた仲間です。苦難にも果敢に立ち向かい、支え合いながら夢に向かって走っていったらと思っています。

3年次になると学外実習にも取り組むことになり、本格的に仕事としての管理栄養士をとらえていくことになります。それに加え、国家試験対策も本格的に始まっていきます。私たちは、セレモニーで誓った覚悟や思いを現実のものにするために、日々の努力を惜みず、乗り越えていかなければなりません。自分の出せる力を思う存分出していきたいと思っています。



栄養学科 部活動の活躍

レシピを通じて社会の健康問題の解決を！



ミルクラ代表 栄養学科3年 田邊 緋菜子

今年度、ミルクラ（牛乳・乳製品サークル）は雪印メグミルク様と共同でレシピ開発に挑みました。きっかけは、一昨年話題となった牛乳の大量処分です。雪印メグミルク様がミルクラのSNSに牛乳消費拡大を応援するといった文章があるのを目に留めて下さり、牛乳の大量処分と一緒に解決したいと声を掛けて下さいました。

オンラインや大学で何度も打ち合わせを行い、「牛乳・乳製品を使用した社会の健康問題を解決するレシピを開発する。」という目標を設定しました。着



メニュー開発の最後に！！

目した健康問題は、「若い女性の痩せ」「高齢者の低栄養」「朝食欠食」「カルシウム不足」「共食回数の減少」です。足掛け9ヶ月に渡って試行錯誤し、これらの健康問題の解決を図る5つのレシピが完成しました。

このプロジェクトで大変だった事は、限られた時間の中で雪印メグミルクさんと連携を図りつつ、何度もアイデア出しや意見交換を行うという事です。社会問題の解決、さらには大手食品メーカーさんとの共同プロジェクトということで、社会的信用や責任感が求められる活動となりました。

レシピ写真の撮影のため東京に足を運んだり、メディアの取材対応を行うなど、刺激のある様々な経験をさせて頂いたと同時に、一つの大きなプロジェクトも、多くの人の協力と連携で成し遂げる事ができるという事を学びました。

共に活動して下さいました雪印メグミルク様の社員の方々、ミルクラの活動を常に全力でサポートして下さいました学務課の渡邊さん、学食を召し上がって下さった方々、関係者の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。レシピを参考にして頂くことはもちろん、この活動を機に、牛乳・乳製品の新たな魅力や活用法を知って頂けると嬉しいです。

この1年の活動を通して～反省とこれからの目標～



Efy天使大学支部代表 栄養学科2年 山崎 紗奈

今年度は、児童会館の子供たちと育てた野菜を使ったお弁当制作や、企業の方と協力してオンライン料理教室を開催しました。また、今年度からは子ども食堂（たんぼぼ食堂）のお手伝いの活動も始まっています。今年度は昨年度よりも「コロナ禍」の環境に慣れてきた年と感じましたが、この環境下でどのように外部の方とつながり共に活動していくのか、どのように活動の輪を広げていくのかなどを考え、反省する1年でもありました。並行してたくさんのプロジェクトを計画してしまい、なかなか活動が進まなかったり、外部の方との連絡も滞ってしまったりと多くの反省点があります。その中で、たくさんプロジェクトを発足して手当たり次第に活動をするのではなく、まずは今の私たちが確実にできる活動を意欲をもって取り組むということが必要だと気づきました。企画の土台作りから始まり、それを形にしていく作業は思っていた以上に大変で企画の進行が停滞してしまうこともあります。それ

ぞれのプロジェクトを実現した後には大きな達成感とたくさんの学びを得られるよう活動していきたいと思います。

外部の方の貴重なお時間をいただいていること、そしてこの大学生活でなかなか経験することのできない貴重な機会をいただいていることを忘れず、今までの反省を活かして大きな学びを得られるよう活動していきたいと思います。



みんなで集合写真

関わってくださったすべての皆様に感謝を込めて

この一年、Dolce（ドルチェ）はお菓子作りのサークルとして、幅広い経験をさせていただきました。イオン北海道様と HTB 様との商品開発では、先輩方が中心となって二種類のコラボ商品を考案しました。約八か月間、何度も試作と改良を重ね、自分たちが納得するものを販売することができました。店頭と並んだ商品を見たときの感動は忘れられません。



クリスマス会で

Dolce代表 栄養学科2年 高橋 舞花



卒業生が経営するコーヒー屋さん月祭様とのコラボドリンク販売では「とろ〜りみたらし大学芋ラテ」「ほっこりかぼちゃラテ」「月の塩キャラメルフロートオレ」「やさしいマロンラテ」の四種類の販売をさせていただきました。一つ一つのドリンクには部員のこだわりがぎゅっと詰まっています。一日店長として、自分のアイデアが少しずつ形になり、実際に店頭で販売される喜びを実感することもできました。「おいしかった」「次のドリンクも楽しみにしているよ」などたくさんの温かい言葉をかけていただき、本当に嬉しい気持ちになりました。農家見学では白老、平取、穂別を訪問し、いただいた野菜を使用してお菓子を作りました。野菜の良さをどのようにしてスイーツに生かすかを考えるのが難しかったです。天使祭では毎年大人気のシフォンケーキとブラウニーを販売しました。ほかの食べ物系サークルと合同でクリスマスパーティーも開催したことで、部員同士の仲も深まったと感じています。これらの貴重な経験や学びを通して、自己の成長に大きく繋げることができました。今後の Dolce の活動も、温かい目で見守ってくださると嬉しいです。

7

ラコミの挑戦～初めての経験から学ぶこと～

今年の最初の活動は、2年ぶりに開催された天使祭でした。サークルの伝統料理である「ラコミカレー」を販売し、先生方や学年・学科問わず多くの学生に食べて頂くことができました。初めてということに不安を感じたまま当日を迎えましたが、皆さんの「ありがとう」という言葉にとっても救われました。

その後、「株式会社ドラゴン・アロー」様に勤務する原真梨さん（2017年3月本学栄養学科卒業）とのコラボが決定し、お弁当販売に向けた活動が始まりました。まず、使用する食材について学ぶために、農家さんに伺い収穫体験を行ったり、オンラインで野菜の説明を聞かせていただきました。私たちの手にわたるまでにどれだけの手間暇がかかっているのかを知り、食材があることを当たり前だと思わず、大切に調理しようと思いました。

天使祭で感じた達成感をまた味わいたいという気持ちを胸に、部員と話し合って試作を行い、学内でのお弁当販売が実現しました。大量調理になったことで試作からの変更があり、慣れない販売に大変さも感じましたが、天使祭や授業での経験を

ラ・コミダ代表 栄養学科2年 長岡 せいら



活かし、役割分担を行いながら無事に終わることができました。

1年間の活動を通して、新しく挑戦することの大変さも感じましたが、それを越える達成感を味わうことができました。何事も初めては不安を感じたり失敗を恐れたりしますが、それらも含めた経験が次につながるということを学んだので、これからも様々な活動に挑戦していきたいです。



サークル活動後に

卒業生紹介

「助産院」を開業して～開業助産師のやりがい～

ていだ助産院院長 野田 由紀（看護学科卒業2004年度 助産研究科修了2008年度）



訪問・オンライン専門の「ていだ助産院」を開業しもうすぐ2年になろうとしています。産院まで1時間以上かかる地域に暮らす母子の安全で健康な妊娠・出産・育児のために相談や産後ケアを行っています。

天使大学卒業後は看護師として就職し産婦人科の新生児室に配属になりました。元気な赤ちゃん、早く小さく生まれた赤ちゃん、病気を抱えて生まれた赤ちゃんの看護を通して、赤ちゃんの健康はお母さんの健康が欠かせないこと、お母さんと赤ちゃんとはセットで看護すべきものだということに気がつき、助産師になろうと思い天使大学大学院助産研究科に入学しました。

大学院修了後、病院勤務やクリニックで助産師として勤め、途中母子領域しか経験がないことに不安も感じたため、外科で看護師も経験しました。

助産師は女性の一生をサポートするのがお仕事ですが、病院で勤務していた頃は退院してから困っていないかな?と思うことはあっても、街中でばったりあったときに近況を聞けるくらいで、継続的な支援ができていくような気がしませんでした。その頃から、地域で活動するという思いが少しずつ芽生えていたように思います。

いざ、開業するにあたって考えたのは、地域で活動するからには、助産師のケアが求められている地域でお仕事をしたいということもあり、オホーツク地方で開業届を出しました。

徐々にではありますが、町内でも助産師の存在や、助産院でできることを認知していただけるようになり、先日は地元の消防で救急車内分娩を想定し講義や演習も行いました。救急隊の方達も真剣に参加してくださり楽しく開催できました。出生数の少ない地域の安全な出産を守っていく活動として今後も継続することとなりました。

平日は主に滝上町の保健師として、天使大学看護学科を卒業した同級生と一緒に仕事をしています。

保健師業務の中にも、妊娠期の関わりや新生児訪問、乳幼児健診をはじめとした母子保健に関わる部分がたくさんあり、助産師の経験が生きてくるころもあれば、保健師として母子を支えていくという視点を新たに学ぶということに時々頭が混乱しながらも、周りの方達にフォローしていただきながら保健師2年目を過ごしています。

助産院を運営しながら役場で勤務をするにあたり、多様な働き方を理解してくださったばかりか、環境を整えてくださっている町長はじめ役場の方達に感謝しきります。

妊娠・出産・産後・子育て期にわたる切れ目ない支援の中に位置づけられている産後ケアは今後ますます重要性が高まっていくと感じています。現在は、近隣の自治体から産後ケアの委託を受けて産後ケアに出向いたり、学生時代から並行して勉強を続けていた整体やキネシオテーピングの技術も提供しています。キネシオテーピングについては協会主催の学会で症例報告を行い、今年はアメリカで行われる国際シンポジウムでも発表とワークショップを担当する予定です。

産後ケアを通して命の喜びや上のお子さんも含めたお子さん達の成長を喜び合い、共に歩むことができるということは、地域で開業し活動することの醍醐味だと思います。この醍醐味を味わせてい

ただいたご家族には本当に感謝です。

また、このあたりでは、産後身体が辛くても整体に行けないという環境でもあるため、訪問で整体を受けていただけるメニューは、大変重宝していただいています。赤ちゃんが可愛くても、育児は楽しくても、産後は疲れるし身体は辛くなります。また、赤ちゃんとの毎日においては、「大人と話をする」ということが少なくなります。何気ない話をしたり、育児の相談などをして、「いっぱい話せてスッキリした～!」と身体も心も前向きになった笑顔を拝見すると、私も嬉しくなります。

地域で活動することのもう一つの醍醐味は、一人のひと、じっくり時間をかけて関わり、回数を重ねられることです。

地域で生活されている方は様々な背景をもっておられます。お母さん自身がどのように育ってきたかという経験は、時にお母さんを苦悩させることがあります。

産後ケアを利用されたあるお母さんは、ご自身の辛かった生育歴も振り返りながら「親としてこの子的心を守りながら育てていくことができるのだろうか?」ととても不安に感じておられました。ただ同時に、「この子を夫とともに育て上げる」という強い決意も感じました。

たくさん苦悩し涙を流しながらも、一生懸命に子育てをされ、芯のあるお母さんになりました。今は子育てを心から楽しまれています。お子さんが1歳の誕生日を迎える時にいただいたメッセージに、「生きてよかった」という一言があり私も涙があふれました。

母親になっていくプロセスは、子ども時代の体験を改めて意味付けしたり、書き換えをしなから、自分に自信を取り戻していくプロセスでもあるなと最近すごく感じます。そのプロセスも全て受け止め共に歩んでいく姿勢が求められていると感じています。

ケアを提供する側の、内面もとても大切だと感じています。

お母さんたちとお話をしながら、「私もこんな体験をして辛かったな」とか、「私も小さいときこんな体験して嬉しかったな」などと、自分自身の内面とも向きあい癒されているようにも思います。もっと関わる方達に愛をもって接することができるように、自分自身とも丁寧に向き合っていきたいと思っています。

子どもは宝です。女性は家庭の中で太陽のような存在です。

女性が健康で笑顔でいられることが、家族を笑顔にします。

多様な暮らしをされている方たちがご自分の幸せを感じ、毎日を過ごしていくことができるようまた、医療過疎の地域において少しでも安心して子育てができるようこれからも研鑽を重ねていきます。



一緒に働いている同級生と一緒に



（第19回）
リレーコラム
本学教職員による

ありふれた場所から教えてもらうこと

「徒然なるままに」といえば日常のことをつらつと書くことらしい。今一度、日常とは何だろうと考えてみた。ここ数年はコロナ禍の影響で非日常が日常となり、その狭間で揺れている感じがかった。世界が不穏な中、非日常はいろいろな状況を含むとは思いますが、特別なとかハレの日という意味も含んでいると思う。

私の特別は「旅行」である。その旅行で必ずするのは、市場やスーパーマーケット巡りである。私の専門の公衆栄養学分野では「地域の食生活を知るにはスーパーに行け」という。そこにある物はその地域でよく利用されている物であり、生活が垣間見えるからである。最初は職業意識で始まったが今では趣味となっている。どのような食品が好まれ、どのように加工されて売られているのか、そこから食文化などを知ることもある。海外でも同様に訪ねるが、今から数十年前、日本ではなかなか定着せず栄養施策の懸念となっていた「食品の栄養成分表示」を見たときには、食環境整備から健康づくりを進める先進的な取り組みが羨ましかった。また、インフラ整備が十分でない赤道直下の国では、スーパー全体を冷やすのではなく、食品の性

栄養学科教授 清水 真理

質によって異なる温度帯の部屋に分けて販売するというエコな工夫で食品の衛生を担保していた。いろいろな発見があり感心や感動する。

日本においては、北九州市には市民の台所といわれる市場がある。観光市場ではなく、錆びたトタン屋根が重なることで支えあって立っているような昭和感満載の市場である。その歴史ある市場が昨年、大火災に見舞われた。先日、訪ねてみたが店舗が焼け落ちた分、寂しくはなっているものの市場は支えあって立っていた。いつも行く果物屋のおばちゃんは来年からの柿の品種の説明を先への希望を込めて教えてくれた。コロナ禍、火災と艱難が続いている中であっても市場が人々の日常を支えているんだという気概がそこにはあった。

今後しばらく、コロナ禍の影響は続くかもしれない。デジタル化、AI化も進み、この先さらに価値観も変化するだろう。それでも、アナログな人と人とのつながりがこの先も続き、ささやかな日常を支えるに違いないのだからと、旅行という非日常で訪ねたありふれた場所にまた教えてもらうことになった。



天使大学

看護栄養学部／看護学科・栄養学科
大学院／看護栄養学研究科・助産研究科（専門職学位課程）〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30
TEL.011-741-1051 FAX.011-741-1077

第34号 2023年3月1日発行 天使大学広報委員会

https://www.tenshi.ac.jp

